
五人の守護者と姫君

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五人の守護者と姫君

【NZコード】

N1846Y

【作者名】

優姫

【あらすじ】

海沿いの町から少し離れた一軒家で踊り子をしていた母と二人で暮らしている少女の家にある日一人の青年が訪れた。

その一人から突然告げられた言葉…私が伝説の王！？しかも、目の前にいる青年は王を守る守護者…………。

突然の訪問

何千も年の歴史の國には神の声を聞く事ができるといつ巫女がいた。

かつてのミーシュ國王は國の繁栄を願い巫女に神の声を届けてもらつた。

そして、神が王に伝えた言葉は伝説となつた。その言葉とは。

『1000年に一度神により選ばれた6人の者が産まれ落ちよう。そのうちの5人は「赤」「白」「黒」「黄」「水」の力を体に秘めている。そして6人目はその5人の者が生まれ落ちた後に産まれ5人の者によつて守られ、この国に繁栄をもたらす伝説の王となる』

『

とつものだつた。王は決めた。少女が生まれ、國の城に招かれた時、現王はその座を少女に明け渡し補佐として少女の手助けをし。その5人の男児は神に信用された少女を守護する者達ということで生まれると必ずすぐ王宮へ上げられ少女が現れるまで守護者としての力を身につけるさせるための用意をさせなければと…。

赤は『炎』、白は『癒』、黒は『闇』、黄は『雷』、水は『水』の力を持つ。そして、6人目の王たる資格を秘めた者はその5つの力を全てを扱えると言い伝えられていた。

「ちよつと。つまみまだ？」

「『』、ごめんねーお母さん遅くなつちゃつて…はい。これ

ミーシュ國の隣の國マインド國の海沿いにある小さな家に少女と母親は一緒に暮らしていた。

「あ、そういえば。今月の稼ぎだしな」

そつ言い女性は少女に手を差し出した。

「え、でもお母さん。このお金出したらお酒もご飯も買えなく…」

「つべこべ言つてんじゃないよー。そんなんまた働いてくればいいだけじゃないかーほらーよこしなー」

そう言いながら少女が大切そうに抱えていた錢の入った袋を取り上げた。

「チツ。しけてんな。たつたこれだけかよ…」

そう言い女性はタバコを加え直し、煙を吐くと酒を飲んでいた。少女の生活はこれが毎日である。

女性は一日中家にいるが、少女は夜は大抵外に働きにでている。

「つたぐ。気持ちわりいな。一体誰ににたんだよ。その髪と瞳の色、気持ち悪くて仕方ないね」

その言葉もいつも聞く言葉だった。少女の髪と瞳の色は今まで同じ人を見かけた事がない色をしていた。

きっと私は魔物の子なんだ。でも、何かの手違いでお母さんのお腹に入っちゃつただけなんだ。だから今頃魔物のところにお母さんの子どもがいるんだ

少女はいつしかそんな事を思つようになつた。

そんなある日

コンコン

「はい…？」

少女が玄関の戸を開けるとそこには赤い髪と瞳をした年は自分より4つほど上と思える青年が立つていた。

青年は彼女を見るなり突然片膝を床につけ頭を垂れた。

「やつと。やつと見つけました。我らが王」

「え？ 王？ あ、あの…？」

少女が状況が飲み込めずアタフタしていると青年の背後から青年よ

り遙かに年上と思われる声がした。

「クスクス。申し訳ありませんアリア様。やつと会えた主君に喜んでいるだけなのです。お許しください」

そう言うと彼はまだ頭を垂れている青年の横に来ると青年に話しかけた。

「セイ。姫が困っている。やめなさい。まだ彼女は何も理解していないのだからね」

そう言うと青年は頭を上げ立ち上がると少女の瞳をじっと見つめてきた。

すると、青年の横の男性が胸に片手を当て一礼をしアリアに声をかけてきた。

「私達は隣の国ミーシュからやってまいりました。私の名はサクサス・マルフと申します。どうぞサクサスとお呼びください。彼の名はセイ。赤の守護者です」

「守…？」

アリアが不思議そうにそつそつとサクサスと名乗った男性は家の中に視線を向け言つた。

「込み入ったお話がありますので…入つてもよろしいでしょうか？」

サクサスがそう言つと、アリアは今までずっと玄関で会話をしていたことに気付きまたアタフタしだした。

「す、すみません…ど、どうぞ…」

そう促されるとサクサスとセイは家中へと入つて行つた。アリアは忙しそうに居間の方に行き、お酒の空瓶が散らかっている部屋を綺麗にした。そして母親に客が来た事を伝えた。

母親はミーシュ國の人がきたと知ると『もう家にあげちまつたのかい！？この役たたず！いいかい！私が着替えを終えて降りてくるまで帰らせるんじゃないよ！』そう言い残し2階の部屋まで走つていった。

母は昔踊り子をしていたので金持ちの男を落とすのが大好きなのだ

つた。そしてミーシュ国といえどお金持ちばかりが住んでいると聞く大国である。

「あ、あの。汚いところで申し訳ありません…今、お茶をお入れしますので少々お待ちください」

アリアがそう告げるとサクサスは今度は胸の前まで手を上げアリアに手のひらを見せるとヒラヒラと振つて見せた。

「いいえ。お構いなく」

そう言われても、こんな貧乏な家にどこからどう見ても王室から来たような煌びやかな人が来ているのだ。お持て成しだけでもちゃんとしなければとサクサスの言葉は受け入れずお茶を入れに行つた。そして、お茶を持ってきて。サクサスとセイの目の前へとお茶を置くと母親が着替え終わつたのか足音無く走つてきてはマリアベルを押しのけテーブル近くに来る。

アリアは母親に突き飛ばされ床に倒れそうになり目を強く瞑るがいつまでたつても衝撃は来なかつた。不思議に思いそつと目を開けると

「大丈夫か…？」

さきほどのセイという青年がアリアを抱え上げてくれていた。青年の端正整つた顔が近くにあると思うとアリアは頬を染めてしまつた。

「あ、あの…」

「…？」

真つ赤になりながら抱えられたままバタバタと暴れているアリアをセイは不思議な表情で見つめているとソファで腰かけアリアの母に腕を組まれた状態でサクサスがセイに話かけてきた。

「セイ。アリア様が困つておられる。下ろしてさせあげなさい」

そう言わると、セイはまるで叱られた雛鳥のように渋々アリアを床に立たせた。それを見ていたアリアの母はそれが気に食わないかのように口を出してきた。

「こんな子どもに敬語など使わなくてもよろしいじゃないですか。この娘は男をたぶらかすのが大好きなんですよ…ああやつて真っ赤になつて暴れれば誰でも自分に優しくなつて、甘えさせてくれ

ると思つていいんですから～」

「ちがつ……」

アリアがそう言おうとするとき、セイがアリアの前に腕を出し言葉を遮つた。

「この方は我ら五人の守護者の頂点に立たれるお方。そして、将来我が国を繁栄にもたらされるお方だ。口を慎め女」

「つつ…なつ…！」

女がサクサスの腕から離れソファに腰かけたまま怒鳴り声をすると、今度はサクサスの言葉が遮つた。

「はあ…まだちゃんとした説明も終わっていないのにそのような事を言つて…」

すると、その言葉にセイが答えた。

「我主わがあるじを侮辱ぶぶじょくする者は誰であらうと許さぬ。」このような場所に主を置いておけぬ説明は城ですればいいだらう

すると、またサクサスが話し出した。

「そもそもいかないよ。『こんな出来損ないな女』でもそこにいる『我ら』の主の母君なんだ。彼女を城に連れていくのにこの女の許しが必要なのは当然だよ」

サクサスにそう言わるとセイは舌打ちをしてアリアの手を繫ぎひっぱるとサクサスの向かいの席に座らせた。そして、セイ本人はまるで守るかのようにアリアの背後に立つて居る。

ようやくセイが大人しくなるとサクサスは小さく溜息を付き腕につかまつっている女の額に手を当て無理やり腕から引き離した。そして、口を開いた。

「私達はあなたに用があつてきたのではありませんので、腕に捕まるのはおやめいただきたい」

サクサスからそう言われるなり女は今までのサクサスやセイに見せていた表情が嘘のよくな表情に変わり言葉使いまで変えサクサスに言った。

「じゃあ何しこきたって言つのや。悪いが、見てのとおりのう

ちにや盗めるようなたいそうな物は置いてないよ」

そんな女にまるでそうかわってしまうのをわかつてていたかのよう

サクサスは話をづつけた。

「私達はアリア様に用があつてここまで参りました

「…え？」

アリアがついそう言つてしまつとまるで今にも殺されそうな目で女に睨まれたのでアリアは俯いてしまつた。そして、アリアの変わりに女が口を開いた。

「冗談言つんじやないよ。こんなどこにでもいる娘にいつたいどんな用…」

女が言葉を言い切る寸前、女の顔の真横を一瞬何かが通つて行き女の頬には何かに切られたかのような切り傷ができ、血が滴つた。そして、女がその事に気付く寸前後ろの壁でダンツ…という音が鳴つた。

女が恐る恐る振り返つてみると、壁にはナイフのような物が刺さつていた。

「ヒ…ヒィイイイイイ…わ、私の顔がああ！わ、私の綺麗な顔にき、傷が！！」

女がそう言いながら前に向き直ると、いつ来たのかアリアの後ろにいたはずのセイが女の目の前に立ちはだかっていた。

「先ほどの言葉…聞こえなかつたのか。口を慎めと言つたのだ。醜い顔をもつと醜くしただけ悲鳴なぞあげるな」

「なつ…！」

女が怒鳴ろうとすると、突然女の横から白い光が表れた。そして、その光何かが女の傷ついた頬に触れると一瞬にして傷が消えてなくなつた。

「セイ。やりすぎです。あなたがいては話が進みません。大人しくしていられないのなら外で待つていなさい」

光が消えるとそこにはサクサスがいた。そして、光が收まるなりサクサスはセイにそう言い放つた。

セイはまたもや舌打ちを一度すると入つてきたときの戸を開け外へ出ていった。

一部始終を見ていたアリアは何を言えばいいのかわからず言葉を失つていた。傷が癒えた本人の女も傷が癒えた事に驚いているのか固まつてしまつていた。

まあ。セイのおかげで話しやすくななりましたかね・・・。

「話を続けさせていただきます。我が国、ミーシュ国の伝説の話をさせていただきます。普通國の王になるのは王家の一族から…どちらの國も決まつておりますが、我が國は違うのです。いえ、正確に言つと1000年に一度だけ違うのです」

そこで少しだけわれに帰つたアリアが聞き返した。

「1000年に一度だけ??」

アリアの言葉にサクサスは一つ頷くと続きを話した。

「何千年前。ミーシュ国ができるばかりの頃、國に一人有名な巫女がいたのです。巫女は神の声を聞く事ができました。かつての王はそんな巫女を信用し、國の繁栄にはどうすれば良いかを聞きました。すると巫女は言つたのです。『1000年に一度神により選ばれた6人の者が産まれ落ちよ。そのうちの5人は「赤」「白」「黒」「黄」「水」の力を体に秘めている。そして6人目はその5人の者が生まれ落ちた後に産まれ5人の者によつて守られ、この國に繁栄をもたらす伝説の王となろう』そうおっしゃったのです」

そこでアリアは先ほどセイに言われた言葉を思い出していた。

『我らが王』

それを見てとつたサクサスはアリアに言つた。

「そう。その6人目が貴方なのですアリア様」

「わ、私は…違い…ます」

アリアが怯えながらもそう告げるとサクサスは負けじとアリアに詰め寄つた。

「私達守護者は初めて我らが王の前に立つと神の声が脳裏に響く

と言わせておりました。ですが、私はここに来るまでそれを信じてはおりませんでした。ですが、先ほど口を開けてくださった貴方を見てやつと信じました。脳裏に神の声が響きました。『 我・彼女を愛し。我・彼女を守り。我・彼女に付き従え 』とね。おそらくセイも戸^{あなた}が開き貴方を見つけた時私と同じく神の声が脳裏^{のうり}に鳴り響^{ひび}き貴方^{あなた}の前に膝まづいたのでしょうか 』

『私達』

アリアは先程から気になつてゐる言葉があつたのでサクサスに聞いた。

「あの…私達…って…」

そこで思い出したかのようにサクサスは立ち上がり胸に手を当て一礼をした。

「先程は言わなかつたでわかりませんでしたね。お許しください。私は白の守護者でござります。癒やしの力を扱います。守護者は各色によつて力が違います。セイは赤の守護者なので炎を操ります。守護者の中でも最高位の守護者です。5人の守護者はもう城に集まり何年もあなたの誕生をお待ちしておりました。まさかミーシュ国外でお生まれになるとは思わなかつたので探し出すのが遅れて申し訳ありませんでした」

そう言いながらサクサスはアリアに手を差し出してきた。アリアはサクサスの優しい微笑みを見ているとどこか安心しきつた気持ちになり差し出された手に自分のそれを重ねそうになる。と、そこで

「黙つて話聞いてりやなにさ 」

そこでいつわれに帰つたのかアリアの母親が口を挟んできた。

「 『いつが神だとか王だとか嘘^{うん}言^{うん}じやないよ。こんなどこにでもいるみすぼらしい餓鬼^{がき}が王? 笑わせんじやないよ。あんた知らないだろ? から教えるけどね。この娘は泥棒だつて簡単にする娘だよ 』

確かにそれは本当の事だ。アリアが差し出した手を引っ込め俯くと、アリアの真横までやつてきたサクサスがアリアの頭に手を当て撫で

ながら言った。

「知つております。アリア様の事は全て調べさせていただきました」

「じゃ……！」

「ですが。それはお母様のためにしたまでの事。アリア様にそうするように仕向けたのはあなたではないのですか？」

サクサスにそう言わると女は口籠ってしまった。

それでも、サクサスは話を続けた。

「この事をマインド国王に知らされたくなれば、この話に口を慎むのはおやめいただきたい」

「つつ！？ カ、勝手にしな……！」

女はそう言つと階段を上がり部屋へ入つてしまつた。

アリアが母を追いかけようとするとサクサスに手首を掴まれる。

「貴方には私達と城に来て頂きたいのです。今すぐ王になれとは言いません。あなたはまだお若い、あなたが王になることができるお年になるまで待つつもりであります。それにあたつて城においていただき力の使い方、王になるための勉強をしていただきます。先生などももう決まつております。後は貴方が来てくださいば」

「わ、私は……」

アリアが何か言いかけると、その言葉を遮るようにサクサスが言つた。

「あなたが我が国に来ていただけないとなりますと、我が国の時期国王はいないと言つことになります……」

「……え？」

不思議そつに見つめてくるアリアにサクサスは悲しそうな表情で告げた。

「確かに、本當でしたら時期国王には王の御子息がなるでしょう。ですが、今のミーシュ國の王には御子息ではなく御息女しかおられないのです。姫様は今のアリア様と同じ恩年11歳であられます。16歳になられますとそのまま別の國へと嫁がれる予定ですので、

我が國の王はいなくなつてしまつのです。やつなると我が國はビリ

なるのか…」

「そ、そんな…」

アリアが泣きそうな顔で後ずさるとそこにまたサクサスが言葉を添えてきた。

「アリア様。先ほども言いましたが。すぐに王になつていただきたいわけではありません。アリア様ご自身に王としての自覚が備わつてからで構いません。城にいる間に無理だと思われたらすぐにでも家にお返しても構いません。お願いです。私達と一緒に城へ…」

アリアはサクサスにそこまで言われ断る事はできなくなつてしまつた。

「わ…わか…り…ました…」

アリアが渋々そう言つと、サクサスは今までの表情がまるで嘘かのようになつた。

「そうですか！ありがとうございますアリア様！それではこのまま今すぐ城へ…！」

アリアの手を掴んだまま連れて行こうとするサクサスをアリアは止めた。

「え…あの。荷物は？」

そう言うアリアにサクサスはまたもや言い忘れという感じに告げてきた。

「いいえ。何も持つて行くものはありません。城の方に既にアリア様のお部屋、お召し物がご用意されております」

そして、そのまま家の外に出ると家の前には白く所々に金の埋め込まれた美しい馬車が止まっていた。そして、その入口のところでこちらに視線を送りただ立つてゐるだけの青年がいた。先程のセイだつた。

アリアとサクサスが家から出でてくる所を見つけると、セイはすぐさまアリアの元へ駆け寄り目の前に片膝を付き頭を垂れた。

「先程はお恥ずかしい所をお見せして申し訳ありませんでした。

お許し下さい」

アリアは一瞬アタフタしたがすぐさま深呼吸を一度し、セイに声をかけた。

「あ、あの。セ…セイ…さん」

そこでセイが頭だけを上げ、アリアの見上げ言つた。

「どうか『セイ』…とお呼びください。我らが王よ」

そう言われアリアは頬を真っ赤に染めながら言つた。

「じ…じゃあ。セイも私のことは『アリア』って呼んで?」

アリアからそう言われたセイは一瞬驚いたように目を見開いた後サクサスの方に視線を送るとそれを見ていたアリアもサクサスに視線を送つた。

サクサスは笑顔でセイに言葉を告げた。

「アリア様の言葉は絶対です」

そう言われるとアリアは満面の笑顔を作りセイに言つた。

「セイ!これからもよろしくね!」

セイはそんなアリアの笑顔を優しく見つめ『よろしくお願ひ致します』と返した。

そして、アリアはセイの手を借り馬車に乗るとすぐに動き出すのかと思ったがまだ動かなかつた。セイは自分の横窓際に腰かけているのにサクサスがまだ外にいるのだ。

不思議になつてサクサスに視線を送ると、そこにはどこかを恐ろしい眼差しで見つめているサクサスがいた。

アリアはその時、サクサスがどこを睨んでいるのかわからなかつたがセイはそのことを知つていた。睨んでいる者も知つていた。

突然の訪問（後書き）

「んにちはーおひさしひぶりの方はお久しぶりです！
最近仕事で「無沙汰しておりましたが…少し空きができましたので
新しい作品を書き始めてみました。

なので！今のうちに他の連載中の作品も完結させてこの作品だけで
なく新作を2～3個書こうと思います！

応援よろしくです

さてさて、今回の「」の作品ですが女の私的な思考？？？で作ってみ
ましたw

簡単に書くと「「んな男の子に愛されたい」みたいな考えで作り
ました

1話では赤と白の守護者が出ましたが。皆さんわかりましたか？赤
の守護者と白の守護者の性格

一応私的には赤は超鈍感で主命な真面目君で、白が大人で優しい頼
れるお兄さんみたいな感じです。まあ、1話だけではわかりません
ね。

2話からは話も進む予定です。残りの守護者も出てきますしね。
残りの守護者の性格もお楽しみ下さい。

長い旅路

お隣の国と言つてもやはり行くのには幾日かかるものだ。ガタゴトガタゴトという音を周りに響かせながら馬車はマインド国とミーシュ国之間。まだミーシュ国には入らない道沿いを走っていた。

一緒に乗るのだと思つていた白の守護者サクサスは茶色いたでがみの黄金色の瞳をした馬に乗り馬車の横を歩いていた。

アリアは今までマインド国からミーシュ国側ではない反対方向の海沿いの町に住んでいたので、その町の外に出た事がなく瞳を輝かせながら初めて見る外の世界を堪能していた。

アリアの前ではそんなアリアをどこか優しく、でもどこか真面目な視線で赤の守護者セイが見つめていた。

少ししたところで突然馬車が止まりサクサスが窓の枠に手を置き中に入れるアリアとセイに話しかけてきた。

「今日はこの村で休みましょう。時期に暗くなりますので早いに越したことはありません」

そう言われ、アリアは空を仰ぎ見てみるともう夕刻と言つてもいいような夕暮れ色に空が染まっていた。これからここらいつたい真っ暗になるだろう。それまでに宿を取ろうと言つことなのだ。

アリア達は今、マインド国ミーシュ国の中間にある小さな村に来ていた。三人は今日一晩この村で過ごし明日、ミーシュ国に入り城に向かうのだ。

馬車から降りようとするとセイに手で制されてしまう。そして一言話しかけてきた。

「アリアはまだ降りませんよう

そう言つと一人で馬車を降りると

しばらく辺りをキョロキョロと見回した後馬車の扉を開け外から中

に手を差し伸べてきた。

「アリア。お手を」

そう言われセイの手に自分のそれをのせると乗つた時同様今度は手を繋ぎながら馬車を降りた。

「ねえセイ? なんで馬車を降りてから周りを見渡したの? 誰か探してたの?」

馬車から降りるとアリアは先ほど何故セイが馬車から降りてすぐ辺をキヨロキヨロと見渡していたのかを聞いてみた。

「あなた様は伝説の我が國の王。あなたが国に来ることで我が国は今まで以上に繁栄することでしょう。ですが、それは他の国にとってたあつてはならぬこと、刺客を送つて来る者もいるでしょう。そのための守護者です」

「??」

セイの言つている言葉の意味がわからず顎に手を当て考え込む。

「簡単に言います。我が国が美しい国になることを他の国の王は反対しています。我が国が繁栄しない…つまりアリア様が死ねば我が国に繁栄は来ないと言つことです。あなたを殺すために殺し屋を送り込んでくるかもしれませんからね。そして我ら守護者はそんなあなたを立派な王に、そして貴方を消そうとする者から守るために存在するのです」

と、今までどこにいたのかサクサスがわかりやすく説明をしてくれた。

「でも私は…!」

「ええ。貴方はまだ王ではありません。あなた自身が決めて下さつて構いません。それでも、伝説の王として生まれてきたのは貴方だけなのです。いつかきっと貴方は王になりうるでしょう。その可能性をまだ小さい芽のうちに紡ごうとしているのです」

何かを叫ぶように言おうとしたアリアの言葉をサクサスが理解したかのように続けて言った。

サクサスの言葉に恐ろしさを感じたアリアは薄く涙を流してしまつ

た。

「 大丈夫だアリア。 我ら守護者がいつもついて守っている命にかえても 」

そう言いながらセイはアリアの額に口づけをした。 突然のことで一瞬何をされたのかわからなかつたアリアは数秒固まつた後、顔を真っ赤にさせ後ずさつた。

「え…！？え！？」

アリアが頬を真っ赤に染めながらセイを見つめているとコホンとわざとらしい咳を一回したサクサスにアリアとセイが視線を移した。

「 申し訳ございません。 アリア様。 突然のことで驚かれたでしょう。 我が国ミニーシュでは額に口づけをすることは相手に忠誠を送ると言う意味があるのです 」

そんなサクサスの言葉を聞くなりアリアはまだ薄く赤く染まつたままの頬を両手で隠し俯いた。

それでもなんだか恥ずかしい… あんな事されたこともない…

と、ここでもまたしてもサクサスが話を区切つた。

「 さて、少し暗くなつて参りましたし。 そろそろ寒くもなるでしょう。 宿に入りましょう。 風邪を引かれては大変です 」

「 宿？ 」

どうやらサクサスは馬を降りてすぐ姿を消していくと思つていたら村の宿屋に話を通し金を払つていったようだ。

アリア、セイ、サクサスはその後宿の方にまっすぐ向かい1階で暖かいスープ、パン、チーズを食した。

そしてその後休む部屋へと行くのだが…。

部屋に入ると、アリアは部屋の中を見渡し、ある事に気付いた。 部屋の中にはベッドが一つしかなかつたのだ。 当然だ、アリアは女性、あと一人は男性なのだから隣の部屋で眠るはずだ。

「 皆さんお部屋に…？ 」

それでもアリアは気になり一人に問い合わせてみた。

「我々には部屋はありません。私は部屋の外周囲を、セイは部屋の前で警護をいたします」

「警護つて、さつき言つてた人達から…？」

「ああ」

次にアリアの問いに答えたのはセイだった。

セイの返事後、先に口を開いたのはサクサスだった。

「それではアリア様、明日お迎えに上がります。お休みなさいませ」

先ほど、宿の外で自分が他国の王に狙われている事を知ったアリアはそれ以上何も言つことができず、ただサクサスの言葉に返事を返すことしか今はできなかつた…。

カチコチッ、カチコチッ…。

「ん…」

布団の中で寝返りをうち扉の方を見つめるアリア。

眠れない…

扉の向こうにはセイがいるはず、どうしようか迷いながらもアリアは布団から這い出て扉の方に向かつた。力チャ。

扉をゆっくり開けると扉の横、アリアが覗いた目の前に壁に背をあずけてセイが床に座りこんでいた。

「あの…セイ…？」

おどおどと話かけると、それに気付いたセイがゆっくりとアリアの方に向いてくれた。そして優しく微笑み、アリアに話しかけてきてくれた。

「アリア、どうかなさいましたか？」

そんなセイにアリアは微笑み返し、彼の横に座つた。

静かな廊下でただ二人、隣どおし沈黙が続いたが、それを最初に破つたのはアリアだった。

「ねえ。セイは私を最初見た時から「我主」って言つてたけど。

セイは構わないの？私みたいななんの取り柄もないそこらへんにいるようなダメダメな娘が王になるとか言われて、挙句自分の主だなんて言られて』

そんなアリアの問いにセイは前を見据えたまま静かに答えてくれた。

『アリア。あなたはご存知ではないかもしませんが、全ての国には必ず一人、我ミニーシュ国より派遣された王に信頼されし者が暮らしているのです。そして、その者は自分の子孫に王より賜った使命を受け継いでゆくのです。その使命とは『必ずや、伝説の王、それを守るべし五人の守護者を見つけ出しづが国へ連れて来い』というものだそうです』

ゆっくり、そして淡々と語られるセイの話をアリアもまた、前を見据えたまま静かに聞き入っていた。

『私やサクサス殿を見ればおわかりになるかもしませんが、守護者となるべき者はその力と同じ色の髪、瞳をしているのです。それは、この世界にはその色の者はたった一人しか存在しないという証でした。ですが、私が産まれたのは国と言われるほど大きくなく、村と呼んだほうが正確な場所だったのです。私はそこで髪や瞳の色が悪魔の落し子だと言われ恐れられ、誰一人として相手にしてくれませんでした。いつしか私は『自分は本当に悪魔の落し子なのだろうか…？私の力は人を殺すためだけのものなのだろうか…？私を必要してくれる人はいないのだろうか？』と思つていました』

セイのその言葉を聞き、以前アリアが海沿いの家で同じ事を考えた事があることを思い出していた。

そんなアリアに気付く事なくセイは話を続けていった。

『そんなある日でした。森で同じ村の子どもたちからいじめをうけ涙を堪えながらも悔しがっていた私のところに一人の旅人が現れたのです。その旅人は言いました。『お前のその髪、瞳はもしや伝説の守護者か？もしそうならば私と共に来なさい、お前の主となるべき者がいつか現れる時まで、私がお前を鍛えてやろう』と、私はその言葉が嬉しかった。自分の力は人を傷つけるだけで守ことはで

きない呪われた力なのだと思つていたからこそ、彼のあの言葉はとても嬉しかつたのです。そしてその時決めました。もし、もし私の守るべき主が現れたのなら全力でお守りしようと、この命我主に明け渡す覚悟で私は主の忠実なしもべにならう、と

最後のセイの言葉でアリアは何かに気付いたかのように勢いよくセイの方に向き直ると、セイもまたアリアの方を向いて微笑んでいた。だが、その瞳はとても悲しそうな瞳をしていた。そして、そのままアリアの手を握るようにして言った。

「私は、10年間あなた様が現れてくださるのを心待ちにしておりました。我…主…」

そう言つとセイはアリアの手を上に掲げ、口づけをした。アリアは頬を真っ赤に染め上げながらも必死にセイに伝える言葉を探した。

「そ、そんな事言わないでください…命を私に明け渡すだなんて…命はセイのものでしう！？人にあげちゃダメ！せつかく持つて産まれたたつた一つの命を人にあげないで！私は…わ…わたし…は…。セイと…セイと友達になりたいの！」

セイにそう叫びながら胸の前で手を掲げながらそう訴えると、そんなアリアにセイは驚いたかのよつに目を見開いていた。自分が突然叫んではしまつた事に恥ずかしさを感じたアリアはそのまま『お、おやすみなさい！』と、それだけを伝えて部屋へ入つてしまつた。

静かになつた廊下に沈黙が落ちた。

翌朝。

ノンノン

「アリア様、お目覚めでしょつか

ゆつくりと戸を開けるとそこには昨日別れた時と何も変わりのないサクサスがいた。

「おはようございます、アリア

サクサスの後ろからゆっくりと静かにセイが挨拶をしてきた。

「おはようございます。二人とも」

そう言いながら一人を部屋の中へと促すと、一人はアリアに一礼して中へと入ってきた。

そのままサクサスは台所へ行き、セイは大きなテーブルの傍まで行き到着するとその窓から外を眺め出した。

アリアは台所へ向かうサクサスを呼び止めた。

「あの、私がお茶入れますから…」

そう言いながら台所へ入ろうとするアリアの胸に片手を当て動きを止めると。

「貴方にそのような事させられませんので、お気になさらず。私におまかせ下さい。美味しいお茶をいれさせていただきます」

そう言いながら微笑むサクサスを見ているとアリアは何も言えなくなり踵を返しテーブルに向かった。そして傍にある椅子に腰かけた。しばらくすると台所からお盆にカップを三つ載せてサクサスがやつてきた。そして、持ってきたカップをテーブルに並べるとポケットに手を入れ地図を出し机に広げた。

「今日はここから北東に行きここにある森を通りて行きます。城に到着するのは今日の夕刻の予定です」

サクサスの指す方を目で追っていると確かに大きな森があった。

「もう少しここから進むとミーシュ国の管轄外になります。我々に何かあつたら助けが来るでしょう」

「何か…？」

アリアがそう疑問の声をあげるとサクサスは一つ頷いてから説明を始めた。

「ええ。今日、通りうとしている森は『魔の山』と呼ばれており異形の者がびこっていると噂されている森です。一度入った者は二度と戻って来ない…と言われています」

そう言われてしまうと怖くなりアリアが一步後ろに下がると後ろから誰かに抱きしめられた。

アリアを後ろから抱きしめていたのはセイだった。

「安心して下さい。アリアは私がお守りいたします」

そう言つとセイはアリアを上から眺め微笑んだのだった。

一階で朝食を終えた三人はそのまま部屋へは戻らず昨日乗った城の馬車の迎えを待つた。

馬車が来ると降りる時同様セイの手を借り馬車に乗り込み後でセイが馬車に乗り込むと扉がしまった。

やはり昨日同様サクサスは馬車の後ろで馬に乗つている。

「森に入る寸前、カーテンを締めます」

突然外を見つめていたセイがそう告げてきた。

「？どうして？」

外を眺めたままのセイにそう問つとそのままアリアの方を見向きもせずアリアの問いに答えた。

「魔の者には色々な者がいるからです。空を飛んで攻撃をするもの、我々守護者が使うような魔法を使って攻撃をする者もいると聞きます。この馬車にはサクサスによって結界が貼られています。カーテンを締めていなかつたらその窓から魔の者は入つてくるでしょう。そのためにカーテンを締めるのです」

セイにそこまで説明されると魔の者がどのような姿をしているのかわからないアリアは恐ろしさに体が震えだしてしまった。アリアは自分を自分で抱きしめるようにして俯いていると突然窓の方から声がした。

「アリア様。大丈夫ですか？」

声の主はサクサスだった。サクサスは心配そうにアリアを見つめると突然片手で拳を作り窓から馬車の中へと伸ばしてきた。

拳をアリアの前で止め、上に手の平が上を向くようにしてから手を開くと中から白く小さい手に乗るほど大きな女の子が出てきた。女の子はサクサスの手を離れフワフワとしばらく飛ぶと、アリアの存在に気づき嬉しそうに近づいてきた。

「 わあ…！サクサス様この子は…？」

サクサスは馬車の横で馬をかりながら馬車内を見つめていた。

「 その子は癒しと守りの精靈カルバです。我々守護者はそれぞれの瞳にあつた魔法を使うことができると説明しましたね」

そう問われるとアリアはうなづいてみせた。

「 それは我々が精靈と神に愛され選ばれて生まれてきたからなのです。精靈は属性によって姿も異なります。例えば…セイ」
名を呼ばれると、アリアはセイの方に向きなおつた。セイはサクサスに名を呼ばれると仕方なさそうにサクサスの時と同様拳を作り胸の前まで拳を持つてくるとまるで気を集中させるかのように目を閉じると少ししてから拳から赤い炎が立ち上り始めた。そして、そのまま拳を開くとそこには赤く燃え上がつた小さい猫がいた。
猫はアリアを見つけると膝に飛び乗りゴロゴロと普通の猫と変わらぬ声を出している。

「 このように炎は猫の姿をした精靈なのです。そして、精靈は力なき人間には懐きません」

サクサスの話した言葉に疑問を持ちアリアはサクサスに聞いてみた。

「 力なき人間？」

「 ええ。力なき人間。それは私と貴方以外の人間の事です。お迎えに上がつた日ご説明したはずですが。私達守護者は五名います。そして、我々の中心に立つ貴方はその五つの魔法全てを滑る力を持つていると言われております。だから、今その一匹の精靈も貴方に懷いているのでしょうか？」

「 そ、そんな…私にそんなものありません…間違いです…」

「 現に一人が懷いているので貴方には力がありますよ」

そう微笑みながら言うサクサスにアリアはこれ以上何も言えなかつた。

そのようにしてしばらく二人で会話しながら進んでいると馬車が突然止まつた。

「 ？」

アリアが不思議に思い窓から外を見ようとするとサクサスが窓の淵に手を起き馬車の前を真剣な瞳で見つめていた。アリアも恐る恐る覗いてみると、そこには森の入口があった。朝聞いた『魔の山』だろう。外から見るだけでも黒く淀んでいて恐ろしいオーラを醸し出していた。

「アリア様ご安心をカーテンさえ締めていてくだされば貴方にはなんの被害もないことでしょう。少しの間申し訳ありませんが、中でセイと話をしていてください」

そう言いながら馬を走らせよとするサクサスにアリアは先程から気になっていた事を聞いてみた。

「あの、サクサス様？サクサス様は中に入られなくてよろしいのですか？」

アリアがそう聞くとサクサスはアリアの頭に手を起き微笑みながら答えてくれた。

「私は癒しと守りを司る術者。馬車に近づく者が入れば排除するのも私の勤め馬車には御者もおりますので、御者を守るのも私の勤めです。御者がいなくなってしまうと馬車を運転できる者がいなくなってしまいますから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846y/>

五人の守護者と姫君

2011年11月30日22時01分発行